

Title	東京歯科大学千葉病院口腔外科当直業務における過去 2年間の患者臨床統計
Author(s)	井本, 大智; 村松, 恭太郎; 恩田, 健志; 野村, 武史; 須賀, 賢一郎; 中野, 洋子; 大畠, 仁; 高木, 多加志; 内山, 健志; 高野, 伸夫; 柴原, 孝彦
Journal	歯科学報, 112(6): 747-752
URL	http://hdl.handle.net/10130/2985
Right	

東京歯科大学千葉病院口腔外科当直業務における 過去2年間の患者臨床統計

井本大智 村松恭太郎 恩田健志 野村武史
須賀賢一郎 中野洋子 大畠 仁 高木多加志
内山健志 高野伸夫 柴原孝彦

抄録：当院は昭和59年9月、大学の千葉市への移転を機に開設され、高次医療機関として診療してきた。また、夜間の救急歯科診療を目的に宿直業務も行ってきた。今回、今後の宿直業務における医療提供の内容と質の向上を目指すため過去2年間の宿直の臨床統計を行った。

対象は平成21年1月1日から平成22年12月31日までの2年間における当院の宿直業務時間に来院または電話対応を行った患者とした。

期間中に対応した患者総数は2,591名であり実際に受診した患者数は1,822名、電話対応のみの対応は769名であった。月別患者数では12月、5月が多く3月が最も少なかった。対応患者のうち当院通院患者は1,158名、院外患者は1,433名で、そのうち救急搬送されてきた患者は100名であった。疾患別患者は歯の疾患が463名と最も多く、次いで外傷415名、顎関節脱臼302名、炎症251名であった。電話対応では歯痛246名が最も多く、次いで外傷が109名であった。

緒言

一般に歯科領域において救命処置を必要とする疾患は少ないが、疼痛、抜歯後出血などの急性症状を主訴に時間外に病院を受診する患者は多い。東京歯

科大学千葉病院口腔外科は昭和56年9月、大学の移転を機に東京水道橋より千葉市に開設され、地域歯科医師会の協力のもと医療連携を重視しながら高次医療機関として診療を行ってきた。また、夜間、休日の救急歯科診療にも常時対応してきた。

しかし、様々な症例に対応するにも関わらず歯科口腔外科領域における救急患者の統計的報告は極めて少なく¹⁻⁶⁾、この実態を把握することは今後の救急歯科診療を行うにあたって重要であると考えられる。

今回我々は、平成21年、22年の過去2年間における当直の臨床統計を行い近年における患者動向および疾患病態について検討したので、その概要を若干の考察を加えて報告する。

対象と方法

対象は、平成21年1月1日から平成22年12月31日までの2年間における東京歯科大学千葉病院の当直業務時間に来院もしくは電話対応を行った患者とした。調査項目として、対応患者数、年代、時間帯、診療科、疾患、月別対応患者数、月別来院患者数、月別電話件数、院内患者と院外患者の比較を行った。院内、院外患者に関しては、当院通院中もしくは通院していた既往がある患者を院内患者、当院に通院しておらず初診の患者を院外患者とした。また、疾患については歯の疾患(歯痛、歯周病、齲蝕症、智歯周囲炎、歯髄炎・根尖性歯周炎など)、外傷(軟組織部裂傷、歯牙破折、顎骨骨折など)、顎関節脱臼、炎症(膿瘍、顎骨周囲炎、蜂窩織炎、上顎洞炎など)、補綴物脱離・破折(義歯、クラウン、テンポラリークラウン、歯科矯正装置の破折など)、

キーワード：救急診療、当直業務、臨床統計

東京歯科大学口腔外科学講座

(2012年4月6日受付)

(2012年7月3日受理)

別刷請求先：〒261-8502 千葉市美浜区真砂1-2-2

東京歯科大学口腔外科学講座 井本大智

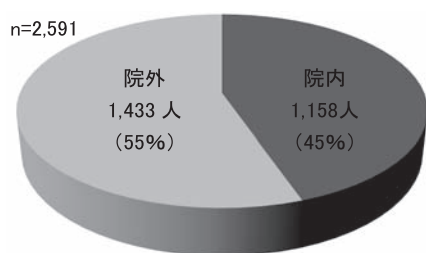


図1 対応患者数

出血(外科処置後の出血, 自然出血など), 抜歯後疼痛, その他(異物刺入, 血腫など)に分類した。なお, これらの調査は当直医が記載する当直日誌より行った。

結果

1. 対応患者数

対応患者数とは来院もしくは電話対応を行った総数である。2年間で2,591名であった。内訳として来院患者数は1,822名で電話対応のみは769名であった。院内, 院内患者の内訳は院外患者1,433名, 院内患者1,158名と院外患者の方が多い傾向であった(図1)。また, 1日平均対応患者数は3.5名で1日の最高対応患者数は19名であった。

2. 年齢別患者数

年代では10歳未満の352名(18.7%)が最も多く, 次いで60代331名(17.6%), 20代285名(15.2%), 30代266名(14.1%), 10代177名(9.4%)の順であった(図2)。

年齢は生後1か月から94歳までと幅広く認められ, 平均年齢は38.6歳であった。

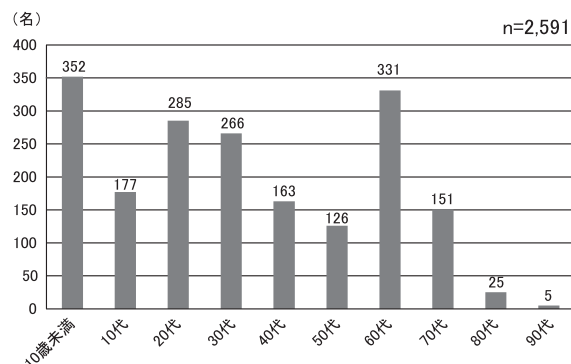


図2 年齢別患者数

3. 急患来院時間帯

当院の当直業務は平日が17時から翌朝9時まで, 土曜日が午後12時から翌日17時まで, 日曜日が午前9時から翌日17時までが勤務時間であり, 最も対応患者の多い時間帯は22時台で253名(9.8%), また, 午前6時台が23名(0.9%)と最も少なかった。尚, 19時から22時の対応が最も多く全体の38%であった(図3)。

平日と休日を比較すると平日は19時から22時が対応のピークであり, 土日祝日は午前中の対応が多く認められた。

4. 院内患者の診療科別患者数

院内患者1,158名を診療科別にみると口腔外科が578名(53.0%)と最も多く, 次いで保存科195名(18.0%), 補綴科106名(10.0%), 小児歯科, 矯正歯科の各72名(7.0%)と続いた。これらが全体の約90%を占め, 残りの約10%はインプラント科19名(2.0%), 総合診療科18名(2.0%), 歯科麻酔科16名(1.0%), スポーツ歯科6名(0.6%), 心療内科3名

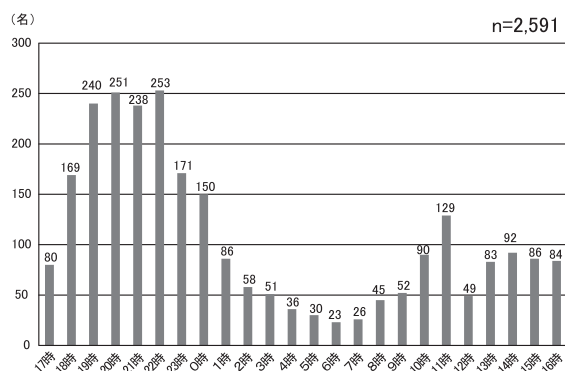


図3 急患来院時間帯

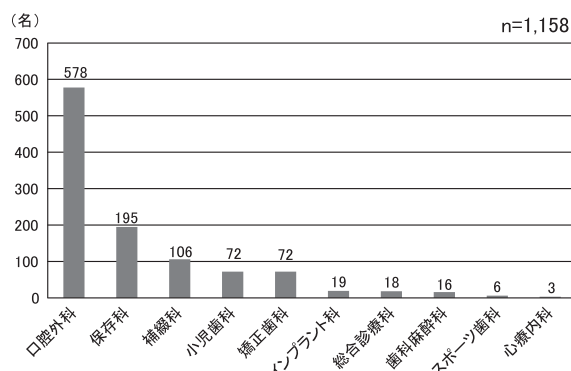


図4 院内患者の診療科別患者数

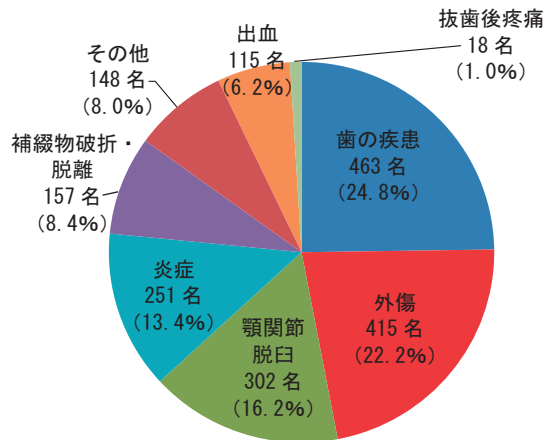


図5 疾患別患者数(来院患者)

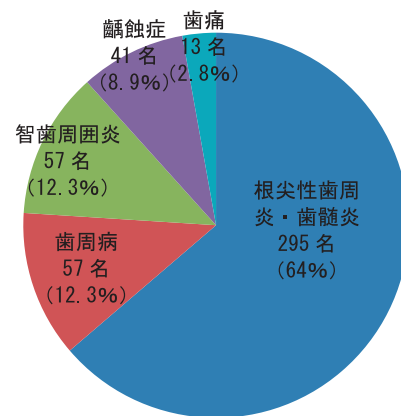


図6 疾患別患者数(歯の疾患)

(0.3%)であった(図4)。

5. 疾患別患者数

来院患者を疾患別に示すと歯の疾患が463名(24.8%)と最も多く、次いで外傷415名(22.2%)、顎関節脱臼302名(16.2%)、炎症251名(13.4%)、補綴物破折・脱離157名(8%)の順であった。また、最も少なかった疾患は拔牙後疼痛18名(1.0%)、出血115名(6.2%)、その他148名(8%)の順であった(図5)。

歯の疾患の内訳では根尖性歯周炎・歯髄炎が295名(64%)と全体の60%以上を占めており、次いで智歯周囲炎、歯周病の各57名(12.3%)、齲蝕症41名(8.9%)、歯痛13名(2.8%)の順であった(図6)。

6. 月別対応来院患者数

月別対応患者数では12月が最も多く262名(10.1%)、次いで5月253名(9.8%)、7月242名(9.3%)であった。最も少ない月は3月の173名(6.7%)であった(図7)。また、月別対応患者数のうち実際に来院さ

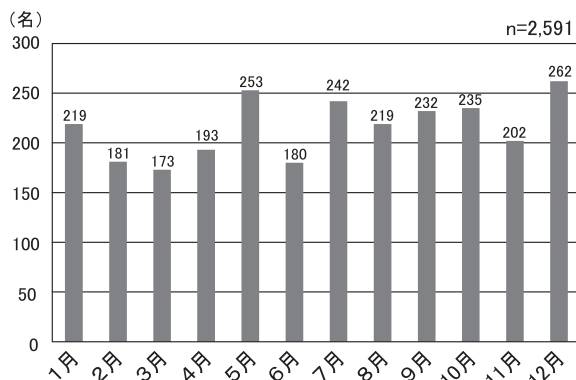


図7 月別対応患者数

れた患者数を月別に示した。来院された患者総数は1,822名で、一日平均2.5人来院している計算となった。内訳として院外患者1,021名、院内患者801名であった。また、最も多い月は12月193名(10.5%)、5月183名(9.9%)、7月166名(9.0%)の順で、少ない月は3月108名(5.9%)と月別対応患者数と同じ結果であった(図8)。

7. 月別電話件数

月別電話件数では7月が最も多く76名(10%)、次いで5月70名(9.2%)、12月69名(9.1%)であった。また、少ない月は2月、11月の各54名(7.1%)であった(図9)。

尚、電話対応総数は769名で、内訳として院内患者345名、院外患者410名、不明14名であった。

電話対応の主訴を疾患別にみたところ、歯の疾患が最も多く246名(32.1%)、次に外傷109人(14.2%)、補綴物破折・脱離89名(12%)であった。また最も少

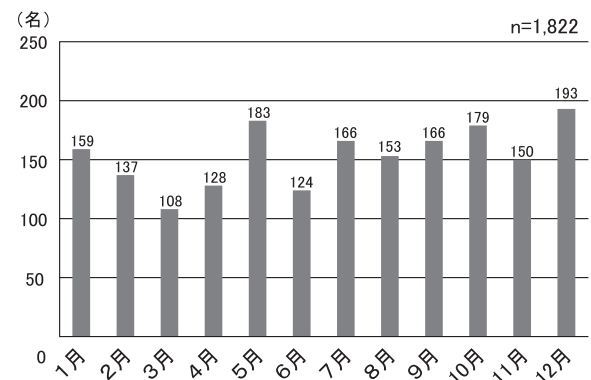


図8 月別来院患者数

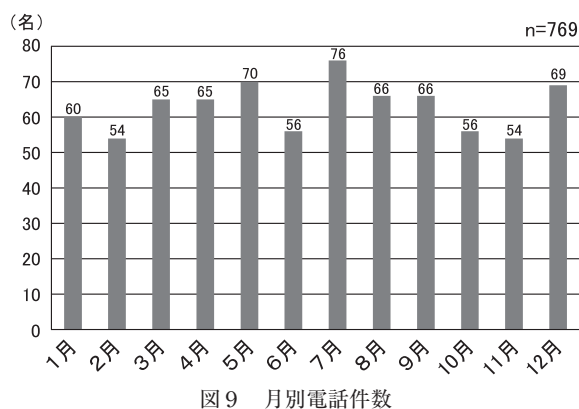


図9 月別電話件数

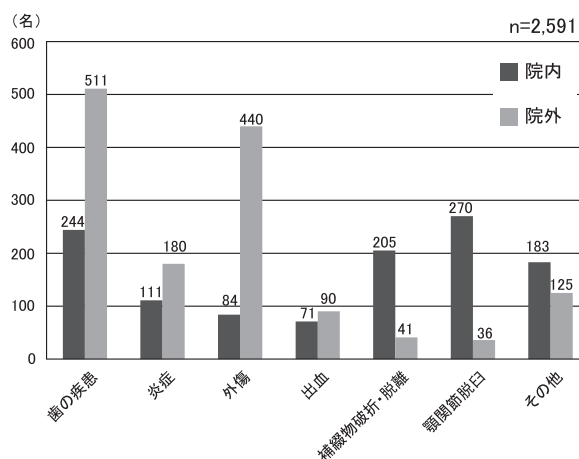


図10 疾患別院内患者と院外患者の比較

なかった疾患は顎関節脱臼4名(0.5%)であった。その他の項目に関しては処方薬の飲み方や次回の来院予約に関してなど多種多様であった。

8. 疾患別院内患者と院外患者の比較

院内患者と院外患者の比較では歯の疾患, 炎症, 外傷, 出血に関して院外患者の方が院内患者よりも多く, 補綴物破折・脱離に関しては院内患者の方が院外患者よりも多い結果であった。院内患者の疾患別内訳では顎関節脱臼が最も多く270名(23.1%), 次に歯の疾患(20.9%), 補綴物破折・脱離(17.6%)と続いた。院外患者の内訳では多い順に歯の疾患(35.9%), 外傷(30.9%), 炎症(12.6%)であった(図10)。

考 察

夜間, 休日の救急歯科診療に関する今回の調査で, 年間約900名の患者を診療していることがわかった。その背景には開設当初から基本姿勢として当院患者のみならず近隣住民や救急隊, また一般開業歯科医院からの要請を積極的に受け入れている地域医療の連携体制の結果であると考えた。院外患者の来院経路としては, 一般開業歯科医院からの紹介, 近隣の救急病院からの紹介が最も多く, 他にはインターネット検索により来院されるケースなどが考えられた。なお, 緊急入院や全身麻酔による手術を必要とする疾患の頻度が低く, 補綴物破折・インレー脱離などの一般治療に対する処置が増加傾向であった理由の1つとして, 近年における一般歯科医院の増加が考えられた。そのため, 急患対応後の診療の引き継ぎに関しては一般開業歯科医院への円滑

な対応をしなければならないと考えており, 当院では対応処置内容などに関して, 治療内容の説明・同意書の作成や, 診療情報提供所などを手渡すことを義務付けている。

年代別では10歳未満が最も多く, これは転倒や落下による歯・顎・口腔領域の外傷が多く認められた。次に60代が多かったのは習慣性顎関節脱臼により同一患者が複数回来院されており, 見かけ上多くなっていたと考えられた。さらに20代は歯の疾患が約半数を占めており, 理由としては安藤, 東山らの報告^{2,3)}と同様に, 仕事による来院時間の調整が困難なことにより, 自覚症状を認めても症状が悪化するまで病態を放置し, 結果として夜間に時間外受診をする者が多いのではないかと考えられた。患者の立場から考えてみると夜間に歯科医師が対応することは大変心強いと思われるが, 夜間受診することが通常という考えにならないようにきちんと指導を行うことも必要と考える。

時間帯別では午後19時から22時台が対応のピークであり, 過去の報告³⁻⁸⁾とほぼ同様であった。また, 東京歯科大学千葉病院の夜間救急歯科診療体制は2名の歯科医師による病棟の当直業務と兼務しており, 定時の点滴静注の時間帯や当直医による病棟回診と重なっているため1名が急患に対応し, もう1名が病棟業務に対応する事もあるため, より円滑で安全な診療対応を行うに当たりこのような問題点もみられた。また, 時間帯別の疾患による内訳では外傷が最も多く, 中でも10歳未満の転倒や転落による

ものが非常に多かった。理由として午後19時以降の時間帯は歯科口腔外科を標榜している2次医療機関が少なく受診先が限られてしまうため、当科に救急来院されていると考えられた。また、小林ら⁹⁾の報告では必ずしも処置が必要ではない症例であっても親の不安感が強く受診する場合も多く、その結果、10歳未満が多い結果となっていることも考えられる。さらに土曜、日曜、祝日は午前11時台が最も多く、疾患別にみると補綴物破折・脱離が多かった。その理由としては、休日明けの診察日まで審美的・機能的障害を不快に感じる患者が多いためと考えられた。

院内患者の診療科別内訳で最も多かったのは口腔外科であった。原因として同一患者の複数来院が最も多かったが、次いで観血処置後の疼痛や出血による来院が多かった。しかし、これらの中には必ずしも応急処置が必要ではなく、担当医が処置後にきちんとした指導を行っていただければ受診しなかったであろうと思われる症例が少なからず認められた。このことから、担当医が術後の注意事項や適切な対応法などを患者に対して細かく指導することがこれらの改善点に繋がると考えた。

月別対応患者数、月別来院患者数では12月、7月、5月が多く、12月、7月は年始や夏季休暇等の長期休暇直前に患者数が増加すると思われた。また、5月に関しては大型連休による影響が考えられ、これらは過去の報告^{3,5-7)}とほぼ同様であった。

来院患者を疾患別にみると歯の疾患が全体の30%を占めており、その内訳では歯髄炎、根端性歯周炎が60%であった。歯の疾患に関しては時に診断に苦慮することもあり、口腔外科だけでなく他科との連携がより必要であることが考えられた。

院内患者と院外患者の比較では歯の疾患、炎症、外傷、出血に関しては院外患者の方が院内患者よりも多い結果であった。このことから、補綴物破折・脱離、顎関節脱臼については院内患者の方が多く、緊急を要さない患者もできる限り処置を行うよう心掛けてはいるものの、やはり保存科、補綴科等の他科担当医との密接な連携が必要と思われる。さらに、宇佐美ら⁴⁾が報告しているように今後、医療の高度化に伴いさらなる医科との関係が必要な歯科患者の増加も予想される。また、応急処置後、翌日以

降に保存科、補綴科、小児歯科等で治療が必要となる症例も多く、病院全体として救急患者へ対応しているとの認識が必要であると考えられた。

今後の展望としては、医療連携を通じ一般歯科医院の先生方に外傷患者や炎症患者への初期対応、処置方法についての講習会を行い、患者の症状が重症化することを未然に防ぎたいと考えている。近年の一般歯科医院の増加に伴い、救急患者も増加することが予想され、口腔外科の必要性がさらに重要視されると思われるが、我々は患者を重症化させないことが最も重要であると考えている。また近隣住民に対しても、炎症のメカニズムや外傷時の対応などの知識を持っていただけるような講演会を行い、症状悪化の予防に努めたい。

まとめ

今回、我々は平成21年1月1日から平成22年12月31日までの2年間における東京歯科大学千葉病院の当直業務時間に来院もしくは電話対応を行った患者の臨床統計を行い患者動向および疾患病態について認識した結果、以下の結果を得た。

- 1) 対応患者総数は2年間で2,591名であった。そのうち、来院患者数は1,822名、電話対応のみは769名であった。
- 2) 年代別では10歳未満が最も多かった。
- 3) 最も対応患者の多い時間帯は22時台であった。
- 4) 院内患者を診療科別にみると口腔外科が最も多かった。
- 5) 疾患別では歯の疾患が最も多く、次いで外傷、顎関節脱臼、炎症の順であった。
- 6) 月別対応患者、月別来院患者では12月が最も多かった。
- 7) 月別電話件数では7月が最も多かった。
- 8) 院内患者と院外患者の比較では歯の疾患、炎症、外傷、出血に関して院外患者の方が院内患者よりも多い結果であった。

本論文の要旨は、第291回東京歯科大学学会例会(2011年6月4日、千葉市)において発表し、座長推薦を受けたものである。

文 献

- 1) 福永秀一, 冲津光久, 永峰浩一郎, 廣井恵美, 古谷明彦, 平安山久仁子, 加藤義浩, 稲田雅仁, 山崎康之, 龍田恒康, 中西 徹, 竹島 浩, 嶋田 淳, 山本美朗: 過去10年間の当科における救急患者の臨床統計的観察. 明海歯学誌, 22: 93~98, 1993.
- 2) 安藤智博, 青木美津子, 高木 紳, 近藤順子, 氏原浩文, 井瀬謙二, 桑沢隆補, 阿部広幸, 扇内秀樹: 東京女子医科大学口腔外科における救急外来患者の臨床統計的観察. 口科誌, 37: 235~241, 1988.
- 3) 東山真弓, 能崎晋一, 中川清昌, 山本悦秀: 金沢大学医学部付属病院歯科口腔外科における救急患者の臨床統計的観察. 日口誌, 20: 31~34, 2007.
- 4) 宇佐美雄司, 若山貴司, 伊藤正夫, 上田 実, 金田敏郎: 名古屋大学医学部付属病院歯科口腔外科における救急患者の臨床統計的観察. 日口誌, 40: 855~861, 1991.
- 5) 小笠原慶一, 石濱孝二, 岡山政樹, 安田浩一, 澁谷 徹, 内藤幸子, 宮沢裕夫, 吉澤清文: 松本歯科大学病院における夜間・休日緊急歯科診療の現状. 松本歯学, 36: 87~92, 2010.
- 6) 西久保周一, 花上伸明, 高田篤史, 森崎重規, 渡邊 裕, 外木守雄, 山根源之: 救急外来における小児患者の臨床的検討. 小児口腔外科, 17: 85~89, 2007.
- 7) 岡 邦恭, 橋本 武, 古川壽男, 赤根賢治, 天羽 隆, 廣田克征, 中原寛和, 連 利隆, 市原 聡, 光井三郎, 木田友信: 一隅に一燈を照らし続ける夜間緊急歯科診療3年間の軌跡. 大阪府歯科医師会雑誌, 686: 8~26, 2007.
- 8) 小森 学, 関山尚美, 露無松里, 飯村慈朗, 重田泰史, 宇井直也, 波多野 篤: 当科における時間外救急に関する臨床的検討. 耳鼻咽喉科展望, 52: 159~165, 2009.
- 9) 小林久美子, 窪田正幸, 八木 実, 奥山直樹, 大滝雅博, 山崎 哲, 村田大樹, 平山 裕, 佐藤佳奈子: 小児外科医による深夜帯小児救急外来患者の現状分析. 日小外会誌, 43: 678~682, 2007.

Clinical statistics of patients over past two years
at Tokyo Dental College Chiba Hospital Dept. of Oral Surgery

Daichi IMOTO, Kyotaro MURAMATSU, Takeshi ONDA
Takeshi NOMURA, Kenichirou SUGA, Yoko NAKANO
Hitoshi OOHATA, Takashi TAKAKI, Takeshi UCHIYAMA
Nobuo TAKANO, Takahiko SHIBAHARA

Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Tokyo Dental College

Key words : emergency care, business duty, clinical statistics

Our hospital is established in September 1984 upon moving of the university to Chiba city, and has treated patients as a high-level medical service agency. We also had night duty for the purpose of emergency dental treatment at nighttime. We did clinical statistics on the night duty in last 2 years to improve the content and the quality of medical service in future night duty.

The subject of this research is patient who came or called to our hospital while 2 years from 1st January 2009 to 31st December 2010.

The total number of the patients whom we dealt with was 2591. The patients who practically had a medical examination was 1822 and who had only phone dealing was 769. December and May had the most patients in monthly numbers, and March was the least. Of the patients, 1158 patients were receiving regular outpatient treatment at our hospital, 1433 patients were receiving at other hospital and 100 of them were emergency transported. When we look at the disease, dental disease had the most, 463 patients, after it an external injury 415 patients, a temporomandibular joint dislocation 302 patients, and an inflammation 251 patients. Of the phone dealing, toothache was the most, 246 patients, after it an external injury 109 patients.

(*The Shikwa Gakuho*, 112: 747~752, 2012)